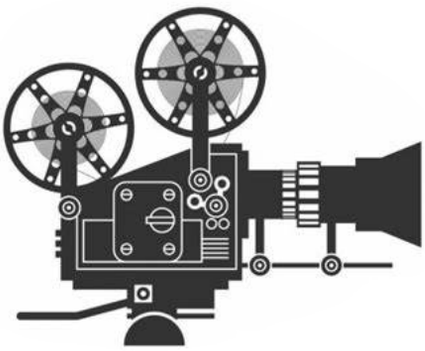

いにしえの映画つれづれ⑯
「初恋」青春スター・ナタリー・ウッドの光と影

千葉豹一郎

ナタリー・ウッドが悲劇的な死を遂げてから、早いもので43年が経つ。43歳だったから、ちょうど死亡時の年齢と同じ年月を経たことになる。この間、謎の死をめぐるさまざまな憶測が乱れ飛び、好奇の的となってきた。マリリン・モンローと同様に伝説化された存在となり、人々の記憶から消えない一方、近年は肝心の出演作や人となりなどが語られることは少ない。

昨今は、ジョディ・フォスターを筆頭に子役出身の有名スターが散見されるが、かつては子役から大成するケースは稀だった。当時、子役から大成した女優はエリザベス（リズ）・テイラーとナタリー・ウッドくらいだった。「オズの魔法使い」(39)のジュディ・ガーランドも途中で頓挫し、「奇跡の人」(62)でヘレン・ケラーの少女時代を演じて天才子役と絶賛されアカデミー助演賞も得たパティ・デュークも伸び悩み、亡くなった時には死亡記事を掲載しない新聞もあった。古くはチャップリンの「キッド」(21)のジャッキー・クーガン、「チャンプ」(31)のジャッキー・クーパー、リズのデビュー作で名犬ラッシーが活躍する「家路」(43)では、リズよりビリング（序列）が上だったロディ・マクドール、「ブルックリン横丁」(45)でやはりアカデミー賞を受賞したペギー・アン・ガーナーも大成せず、「宝島」(50)等ディズニーの秘蔵っ子だったボビー・ドリスコルに至ってはたびたび警察沙汰を起こし、薬物中毒で死亡して一時は身元不明者として埋葬されていた・・・。

ウッドはリズほどの大スターにはなれなかったが、その演技力は幼い頃から折り紙付き。「バターフィールド8」(60)「バージニ・アウルフなんてこわくない」(66)で２度アカデミー主演賞を得たリズよりもずっと評価が高く、着実にキャリアを重ねて階段を上っていった。リズ同様に日本人並みの小柄な体格ながら、八頭身でスタイルが良く欠点を補って余りあった。少女時代から大人っぽい雰囲気を漂わせていたリズは、一気に大人の女優へと脱皮していったが、ウッドは青春期が長く、ジェームス・ディーンの「理由なき反抗」(55)、文芸悲恋物の「草原の輝き」

「初恋」のパンフ。

ウッド絶頂期の「草原の輝き」。

(61)、ミュージカルの金字塔「ウエスト・サイド物語」(61)のドラマティックな青春のヒロインとして映画史にその名を残す。今回の「初恋」もその時期の代表的な1 本である。ウッドの出演作の中ではあまり知られておらず、半世紀以上前にテレビ放映されたきりだが、右の作品群よりむしろウッドの魅力が存分に生かされている点で特筆される。

誰もが通る甘く切ない初恋。年上の男との初恋に揺れ動く思春期の少女の微妙な心理を、ウッドが渾身の力で好演した。少女の視点からばかりでなく母親の視点からも描かれる等、きめ細かい描写も話に膨らみを持たせて本作を忘れ難いものにしている。ウッドが憧れる年上の男に、「雨に唄えば」(52)等ミュージカル・スターとして知られるジーン・ケリー、母親に「駅馬車」(39)やハンフリー・ボガートの「キー・ラーゴ」(48)でアカデミー助演賞を受賞したクレア・トレヴァー、ウッドを慕う若者にテレビ「ルート66」のマーティン・ミルナーと、やはりテレビ「サンセット77」でほんの一時期ブレークしたエドワード(エド)・バーンズと新旧の多彩な顔ぶれがキャストインしている。意外なのは原作者で、ハンフリー・ボガートが偏執的な艦長を熱演した問題作「ケイン号の叛乱」(54)でピューリッツァー賞を受賞したハーマン・ウォーク。主に戦記作家として知られるウォークの原作は、少女の心の機微を卓抜した筆致で描いて300 万部ものベストセラーとなり、映画化に際しては、当時としては破格の百万ドルが支払われたという。主役のマージョリー役は、「ベビードール」(56)等のキャロル・ベーカーをはじめ数百人の候補の中から切望していたウッドが射止め、期待に違わぬ名演を見せた。演劇少女という役どころはウッドにうってつけで、これ以上の適役はいまい。ウッドの輝くような一途な眼差しがみずみずしい。 学生演劇でジュリエットを演じたことで演劇に魅入られたマージョリー(ウッド)は、夏休みに訪れた保養地で、地元でショウを演出するノエル(ケリー)と運命的な出逢いをする。マージョリーは大人っぽく知的で洗練されたノエルの虜となり、ショウの演出を手伝うことになった。好意を寄せてくるノエルの助手ウォリィ(ミルナー)も、ノエルに夢中なマージョリーには煩わしいだけだったが、当のノエルはなかなかこたえてはくれなかった。やがて、ふたりのことはマージョリーの母親(トレヴァー)らの知るところとなり、引き離されてしまう。ノエルもひとり立ちしたウォリィが名声を得るにつれ、いたたまれなくなって姿を消した。マージョリーがようやく探し出したノエルは、グリニッジ・ビレッジのアパートで女性と住んでいた・・。それでも、裕福なプロデューサーと結婚した学友に頼み、ウォリィが無理だと言うのも聞かずに、ノエルに舞台演出の機会を与えた。しかし、全力で臨んだノエルは失敗し、ヨー

「ウエスト・サイド物語」リチャード・ベイマーと。
「トゥナイト」をはじめ劇中のウッドの唄は、すべて吹き替えだった！

「マンハッタン物語」。スティーブ・マックィーンは、この頃人気急騰中だった。

ロッパへ去ってしまう。なおも諦めきれずに追ったマージョリーは、ノエルが保養地に戻ってショウを演出しているのを知った。マージョリーはあの頃と同じように振る舞うノエルを見て、青春の淡き夢だったことをはっきりと悟った。ノエルはこのままにしておくのが一番いい・・・。バスで当地を離れたマージョリーは、バックミラーの中に微笑むウォリィを見たのだった・・。

精神年齢の成長の早い年頃の女性にとって、同世代の男は何とも子供っぽくて頼りなく、年上の男に憧れるということはよくある。概して物知りで羽振りもよく、小僧や若造のかなう相手ではない。だが、女性が年を経てさまざまな経験を重ねていくにつれ、次第に粗が見えてつまらぬ男に思えてくることも珍しくない。この映画は、そうした過程を実にうまく描いている。芸術家肌で稀有な才能を持ちきらびやかに見えたノエルも、しょせんは独りよがりの井の中の蛙だった・・・。それだけにとどまらず、ここぞという場面で問題を解決しようとする意志に欠け、何事も中途半端に投げ出すダメ男ですらある。こういう男は相対的に当たりが柔らかく、それが若い女性には優しさの表れに見えたりするものだ。マージョリーの母親と対面する場面で、わずかな会話からノエルの本質を見抜いたのは、さすがに年の功だ。

ウッドは幼い頃に、ロケで地元を訪れたアーヴィング・ピシェル監督に見出され、必ず女優にすると折り紙をつけられて端役で数本の映画に出演。「三十四丁目の奇跡」(47)で脚光を浴び大きく注目された。その後も順調にキャリアを重ね、「理由なき反抗」でアカデミー助演賞にノミネートされて、50年代を代表する若手の1人となった。61年には「草原の輝き」「ウエスト・サイド物語」と代表作となるドラマティックな役どころが続き、前者ではアカデミー主演賞にノミネートされた。受賞こそ逃したが、スティーブ・マックィーン共演の「マンハッタン物語」(63)でも再びアカデミー主演賞の候補になり、「セックス・アンド・ザ・シティ」の原型になったともいわれるピンク・コメディ「求婚専科」(64)、ドタバタ・コメディの「グレートレース」(65)、自身を投影したようなバックステージ物の「サンセット物語」(65)、「雨のニューオリンズ」(66)と快進撃が続いた。ところが、夫婦交換を描いたセックス・コメディ「ボブ&キャロル&テッド&アリス」(69)あたりから振るわなくなる。

出産で子育てに専念したこともあって70年代に入ると映画出演は減り、テレビ・ムーヴィーに出る程度となった。60年代後半から席捲したアメリカン・ニューシネマの影響で、演技力はあってもウッドのような従前の人気スターの活躍する場は減っていった。ニューシネマの波に乗って台頭してきたフェイ・ダナウェイ、キャサリン・ロスらのスターたちとウッドでは明らかにタイプも異なり、年齢的にも難しい時期にさしかかって、時代の波に翻弄されたといえよう。

ウッドは恋多き女としても知られ、ジェームス・ディーン、プレスリー、デニス・ホッパー、タブ・ハンター、レイモンド・バーらと浮名を流し、プレスリーは彼女が何通りもの泣き方が出来ることに恐れをなして逃げ出したといわれる。結局、人気の絶頂期にロバート・ワグナーと19歳で結婚。一児をもうけるも5年後に離婚し、「草原の輝き」で共演したウォーレン・ベイティと婚約したが、結婚には至らなかった。その後、プロデューサーとの再婚も破局し、再びワグナーと元のさやに収まった。ところが、「メテオ」(79)に

「求婚専科」はトニー・カーティス、ヘンリー・フォンダ、ローレン・バコールら豪華キャストで、実に楽しい上品なお色気コメディだった。

続く久々の映画「ブレインストーム」(83)の撮影中の81年11月、共演者のクリストファー・ウォーケンと夫のワグナーらと乗った自家用ヨットから転落して行方不明となり、翌日、水死体となって発見された。事故死とされたものの、有名スターの不可解な死に好奇の目がそそがれ、さまざまな憶測が乱れ飛んだ。その最たるものは、夫ワグナー犯人説である。ウォーケンとの仲が噂されていた妻と口論になり、カッとなってヨットから突き落としたというものだ。初めから突き落とすつもりでヨットに乗せ、あわよくばウォーケンに疑いがかかるようにしたとの謀殺説も囁かれ、夫ワグナーこそが真犯人だという説が根強かった。無論、ワグナーは一貫して疑惑を否定し、自伝でもそう述べている。事件から30年が過ぎ、ようやく記憶が薄れかけた2011年、自家用ヨットの船長が偽証を告白したことから事件は急展開し、再び世間の耳目を集めることとなった。「ブレインストーム」の監督ダグラス・トランブルも、事件直後の制作会社の不可解な対応に疑念を持ったことを19年に明らかにしている。当局は事故死という見解を不審死に変更し、ワグナーやウォーケンらの関係者に事情聴取に応じるよう要請した。年月が経っていることもあって、事件と断定出来るまでの証拠もなく、ある意味灰色の見解といえよう。ウォーケンは弁護士立ち合いで聴取に応じたが、夫のワグナーは“重要参考人”にもかかわらず、現在まで頑なに拒否し続けている。本当に潔白なら疑いを晴らす絶好の機会なのに、これではやっぱり怪しいと自ら認めているようなものだ。ウッドの妹のラナも真相を明らかにするようずっと言い続けているが、望み薄だろう。1930年生まれで高齢のワグナーに残された時間も少なく、残念ながら謎のままとなる公算が大きい。このラナも女優で、「007ダイヤモンドは永遠に」(71)にボンド・ガールとして出演し、キャンペーンで来日もしている。ラナは姉のナタリーが亡くなった直後から、1度袖を通した服を2度と着なかったので4千着もの衣服が遺されたこと等ナタリーについて述べ、姉に関する著書も何冊か出版している。ラナも恋多き女性のようで5度の結婚歴があり、すべて離婚や無効で破綻している。新著の中で「ダイヤモンドは永遠に」の撮影中にショーン・コネリーと親密な関係にあったこと共に、ナタリーについて驚くべきことを暴露している。何と、ジョン・ウェインと共演した「捜索者」(56)の撮影中の55年の夏、カーク・ダグラスに暴行されたというのだ。本欄23年5月号②「探偵物語」(51)で紹介したように、ダグラスは戦後派の代表格として自らのプロダクションを興して意欲作を制作する等、50年代のトップスターの1人だった。そんなダグラスに引き立ててもらうべく、ウッドの母親が娘のキャリア・アップを願って会わせた。ところが、大分時間が経った後、セッティングした有名ホテルの部屋から服装の乱れたウッドが母親の車に走り込んできたという。ウッドはまだ10代で、車中で寝ていた8歳のラナは、当時何が起きたのかをよく理解できなかったと語っている。姉から真相を打ち明けられたのは後のことで、公にすれば逆にウッドが潰されるとの意見で母娘が一致し、泣き寝入りせざるを得なかったという。かつて映画界で当たり前のように横行していた、典型的なセクハラ、パワハラである。本人たちが故人となった今では真相は藪の中だが、ダグラスの息子マイケルは「ふたりに安らかな眠りを」との声明を出した。華やかに見えるハリウッドも内実は魑魅魍魎の世界で、非業の最後まで遂げたウッドは最大の犠牲者の1人といえるだろう。

****

「初恋」　1958年　アメリカ　カラー

Marjorie Morningstar

原作　ハーマン・ウォーク

監督　アーヴィング・ラパー

出演　ジーン・ケリー

ナタリー・ウッド

クレア・トレヴァー

マーティン・ミルナー

著者紹介

千葉豹一郎

作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30年代の備忘録（電子版）」(ユニワールド)「猫と映画人（電子版）」(アドレナライズ)等の他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。

© Miriamword Co.,Ltd.

あの日、未来は明るかった――。
慌ただしくもほっこりと、現代人の郷愁を誘う
“昭和30年代のマスカルチャー”

大田区大森を中心に、高度成長期の東京がいきいきと甦ります。

ケーシー先生や力道山に憧れ、アトムや鉄人に熱中し、カラーテレビが、クーラーが、ハンバーガーショップが身近に押し寄せてきた夢いっぱいの少年時代。一方で、周りを見回せば捨てられたガム、連続する鉄道大事故、暴走タクシー。牛の絵柄の馬肉100%コンビーフや怪しい溶けないアイスも売られ、食の安全はそっちのけ状態。“古き良き昭和”ばかりではない、リアルな日本の高度成長期を描いた軽快なエッセー。

付録ムービー
テレビ・芸能
1. テレビの青春時代
2. 教科書だったアメリカのドラマ
3. プロレスと力道山
4. 実写版「鉄腕アトム」と「鉄人28号」
5. コマゾンの女王 楠トシエ
家電
6. 電気釜の憂うつ
7. カラーテレビ狂想曲
8. リモコンテレビが欲しい！
9. クーラーをつけたまま寝ると死ぬ!?
10. ポラロイドカメラ
11. 可愛いフジペットカメラ
12. 8ミリフィルム
食
13. モナカカレーと「少年ジェット」
14. アメリカンドッグ事始め＋レモネード
15. ハンバーガー開拓史
16. スパゲティは炒める物？
17. 謎のフトルミン
18. 駄菓子屋とお菓子屋のあったころ
19. 粉末ジュース盛衰記
20. 傑作！噴水型ジュース自販機
21. 10円アイスクリームが花盛り
22. 消えたガムつれづれ
ホビー
23. 鉄の手裏剣
24. 2B弾とクラッカー
25. 銀玉鉄砲の王道
26. 輝くマテル
27. 黒かった金属製のモデルガン
28. プラモデル熱中時代
社会・文化
29. ケネディの時代
30. 外車変遷記
31. 国産車は酷使車？
32. サンドイッチのような車の三角窓
33. デパートはワンダーランド！
34. 町の映画館
35. 折りたたみ式コップ
36. 月刊マンガ誌と付録
37. ペラペラのソノシート

＊当書DVD版は、月刊FDI編集部にて＊
本文：108ページ / 映像：2分23秒　2012年9月 ミリアムワード㈱ 発行
価格：1,980円（税込）
株式会社ユニワールド　東京都世田谷区上北沢3-17-5 杉本ビル1F
TEL.03-6379-8890　FAX.03-6379-6190　info@uni-w.com